松原市文化財報告　第２冊
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第297集

松原市

池　内　遺　跡

松原市天美東土地区画整理事業地区内における店舗建設に伴う
池内遺跡（Ｃ２－４－６）発掘調査報告書

2019年３月

松原市教育委員会
公益財団法人　大阪府文化財センター

松原市文化財報告　第２冊
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第297集

松原市

池　内　遺　跡

松原市天美東土地区画整理事業地区内における店舗建設に伴う
池内遺跡（Ｃ２－４－６）発掘調査報告書

松原市教育委員会
公益財団法人　大阪府文化財センター

1．　池内遺跡（Ｃ２－４－６）遺構面 全景（西から）

2．　池内遺跡（Ｃ２－４－６）遺構面 全景（南から）

第１章　調査に至る経緯と経過

（１）調査に至る経緯

池内遺跡は、松原市天美東２～５丁目、天美北１・６丁目に所在する（図１）。近鉄南大阪線河内天美駅の北側にて、東西最大長約 900 m、南北最大長約 650 mの範囲に広がる弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。

当遺跡は周知の遺跡であり、平成 17 ～ 22 年度には都市計画道路大和川線外の建設に伴い、財団法人大阪府文化財センター（現在は公益財団法人大阪府文化財センター、以下「当センター」という）が総面積約 26,000㎡という大規模な発掘調査を実施した。その結果、弥生時代前期の水田や環濠をもった集落、平安時代後期の掘立柱建物・井戸・土坑墓・区画溝などから構成される屋敷地や集落が検出された。また、平成 21 ～ 23 年度には都市計画道路大阪河内長野線の建設に伴い、当センターが総面積約 11,560㎡の発掘調査を実施し、古代から中世の掘立柱建物・溝・土坑などからなる集落や、条里坪境に合致する溝・堤などが検出された。

これらの幹線道路の建設によって、天美地区の開発への機運が高まり、松原市と地権者との間で土地区画整理事業によるまちづくりが検討される中で、大型商業施設が当地区への出店を表明した。そして、平成 26 年２月には松原市天美東土地区画整理事業準備組合が、さらに平成 27 年６月には松原市天美東土地区画整理組合が設立され、業務代行者として（株）竹中土木大阪本店が決定された。

天美東土地区画整理事業は、大型商業施設等の用地に必要な基盤整備をおこなうものであるが、この建設計画区域が池内遺跡の包蔵地にあたることから、平成 27 ～ 28 年度には当センターが総面積 16,365㎡の発掘調査を実施した。その結果、古墳時代中期の土坑や井戸、平安時代前期から中期にかけての掘立柱建物や井戸・溝・土坑・轍などが検出された。

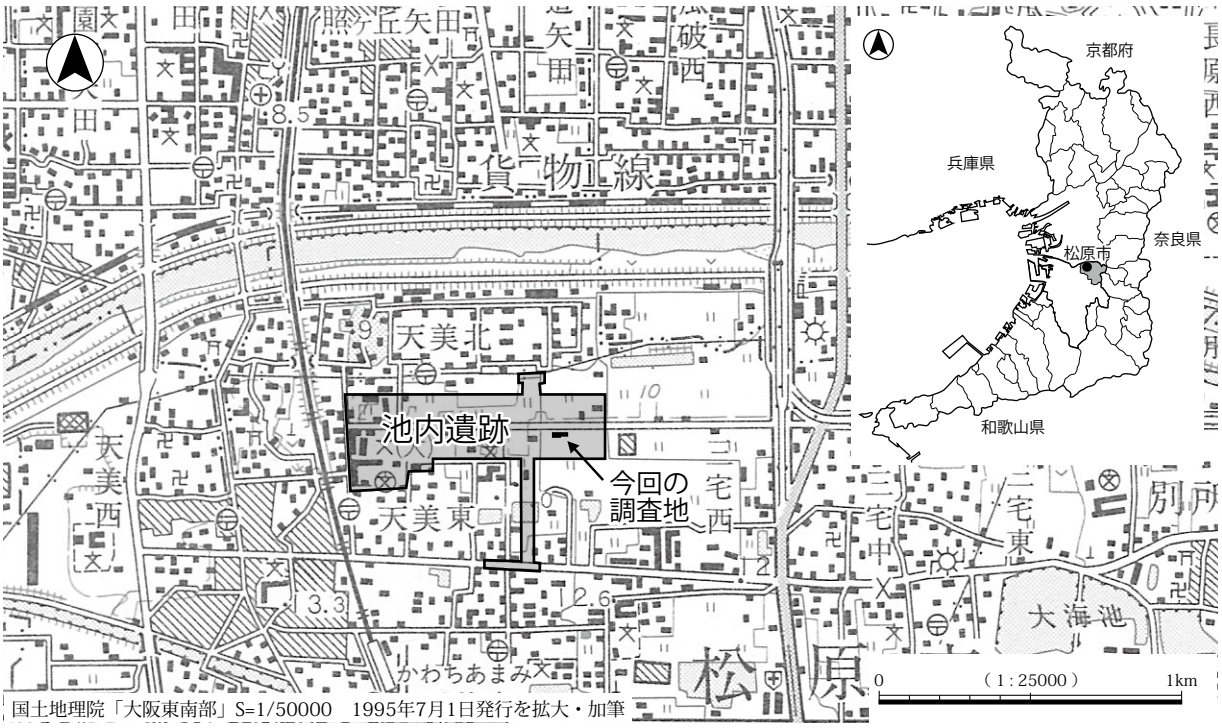


図１　遺跡位置図

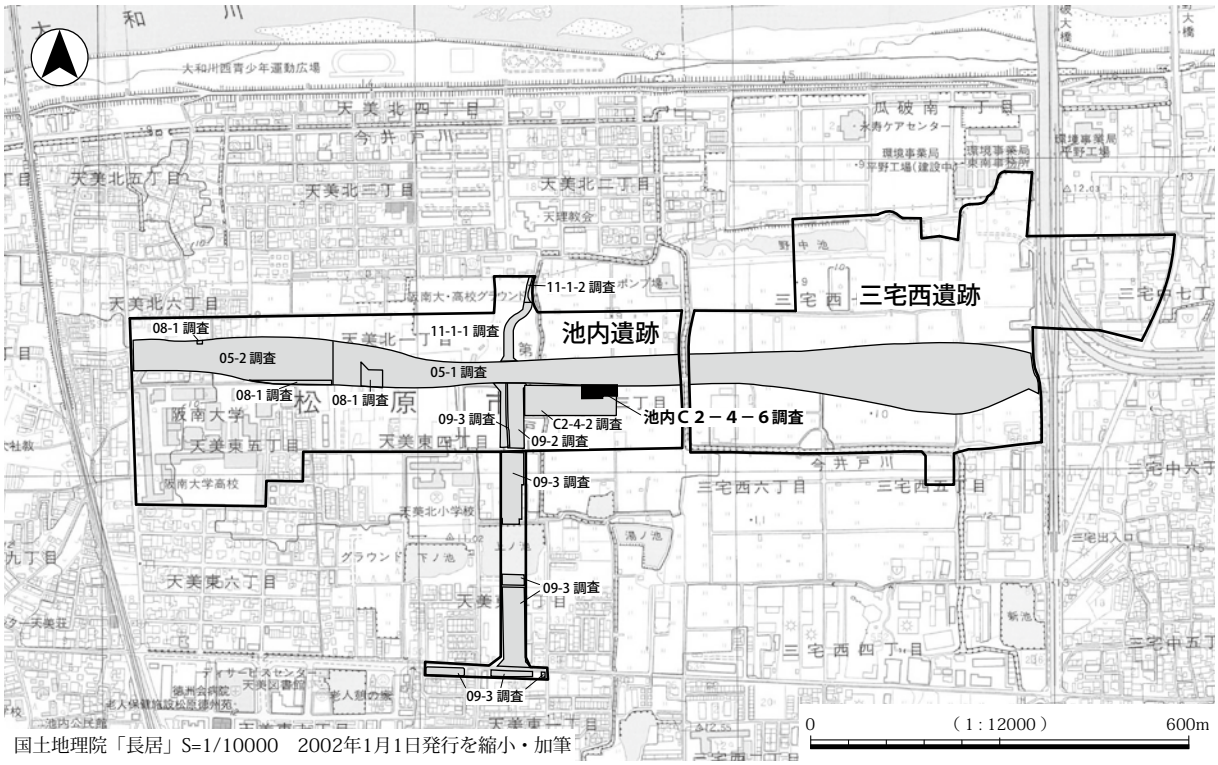


図２　調査区位置図

今回の発掘調査も、この天美東土地区画整理事業に伴うものである。平成 30 年 10 月 22 日付けで松原市教育委員会、松原市天美東土地区画整理組合、（株）島田組、当センターの 4 者が協定書を取り交わし、同月 31 日付けで、（株）島田組と業務委託契約を締結、690㎡を調査するはこびとなった。

調査方式としては、松原市教育委員会と当センターとの合同調査という形で実施し、現地調査・整理作業は当センターがおこない、調査終了後に出土遺物・図面・写真類は松原市教育委員会に引き渡し、保管することとなっている。

（2）調査の経過

今回の調査対象箇所は、平成 27 ～ 28 年度におこなわれた発掘調査（池内遺跡Ｃ２－４－２）地点の北東側にあたり、東西 53 m、西側南北 17 m、東側南北 13 mである（図２）。

調査に先立ち平成 30 年 10 月 25 日から盛土の除去をおこない、調査は 11 月 1 日に現代耕土を機械掘削することから開始し、11 月 7 日からは人力掘削を開始した。

掘削を進めたところ、中世の耕作土層およびその床土と考えられる第２層の下面で、顕著に遺構が存在することが判明した。そこで、この遺構面について 11 月 29 日にラジコンヘリによる空中写真測量および高所作業車による写真撮影をおこなった。そして、11 月 30 日に松原市教育委員会の立会を受け、確認を得た後、現地調査を終了した。

12 月 1 日より中部調査事務所に移り、整理作業を実施した。現地で作成した遺構図面の整理・トレース、特徴的な遺物の抽出・接合・復元並びに実測・トレースをおこない、それぞれの版下を作成したほか、遺物の写真撮影と、遺構・遺物写真図版版下の作成、各台帳類の作成・整備と遺物の収納を実施し、平成 31 年３月 29 日に本書を刊行し、これをもって一連の事業を終了した。

第２章　位置と環境

（１）地理的環境

池内遺跡の所在する松原市は、大阪府のほぼ中央部に位置する。市内には大きな起伏がほとんどなく、その中では南南東が高く、北北西に向け緩やかに低くなる地形である。市の主要な河川として、北側には奈良県に源流を持つ大和川が東西に流れ、西側には狭山池を源とする西除川が南北に、東側には同じく狭山池を源とする東除川が南北に流れている。

現在の西除川は近鉄南大阪線河内天美駅付近で西へ折れて大和川に合流するが、これは 18 世紀初頭の大和川付け替え後の流路である。それ以前は、西除川はそのまま北上して大阪市生野区舎利寺・巽付近において東除川と合流し、さらに北へ流れたのちに旧大和川へと流れていた。旧西除川右岸には、松原市河合町付近を頂点として北方へラッパ状に広がる氾濫原が形成されており、池内遺跡はこの旧西除川右岸の氾濫原上に立地している。

（２）歴史的環境

池内遺跡が位置する河内平野南部には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く所在している（図３）。以下、各時代の主要な遺跡を概観していく。

旧石器時代　大和川今池遺跡では、翼状剥片石核や国府型ナイフ形石器などが出土した。瓜破遺跡でも当該期の石器のほか、サヌカイトのチップも確認されており、後期旧石器時代の石器製作に関わるものと考えられている。瓜破北遺跡では、姶良 Tn 火山灰（約２万９千年前）が降灰する以前の後期旧石器時代前半期に属する石器群に加え、後期旧石器時代後半期の石器集中部も検出されており、ナイフ形石器やハンマーストーン・石核・剥片などが出土している。

縄文時代　草創期の土器はまだ出土していないが、大和川今池遺跡では、その時期に属する有舌尖頭器が出土した。早期から前期にかけては瓜破遺跡で土器や石器が出土しており、特に早期末から前期初頭の遺物が目立つ。出土した石器の中には、地元で採れるサヌカイト以外に島根県隠岐島産の黒曜石が少量含まれており、遠隔地との地域間交流があったことを窺わせる。中期から晩期にかけての遺物も、瓜破遺跡で検出された自然流路から一定量出土しており、周辺に集落が存在する可能性を考えさせる。また、池内遺跡に隣接する三宅西遺跡では、後期中葉の良好な土器群が出土した。

弥生時代　前期では池内遺跡の西側において、２重に併走する溝によって囲まれた平地建物・掘立柱建物からなる居住域（前期中葉）が確認されており、これよりも古い時期の小区画水田も検出されている。中期では、三宅西遺跡で 30 棟以上の竪穴建物が検出されており、このほか、天美南遺跡で掘立柱建物、高木遺跡で竪穴建物や井戸などが検出され、集落が点在する様相が窺える。また、東新町遺跡では、当該期の溝が検出されている。

瓜破遺跡は、前期から後期まで継続する集落が確認されており、中国新代に鋳造された貨幣「貨泉」が採集されたことでも学史的に有名である。この瓜破遺跡で検出された後期前半の竪穴建物などからなる居住域からは、注目すべき遺物として前漢代の異体字銘帯鏡の破片が出土している。

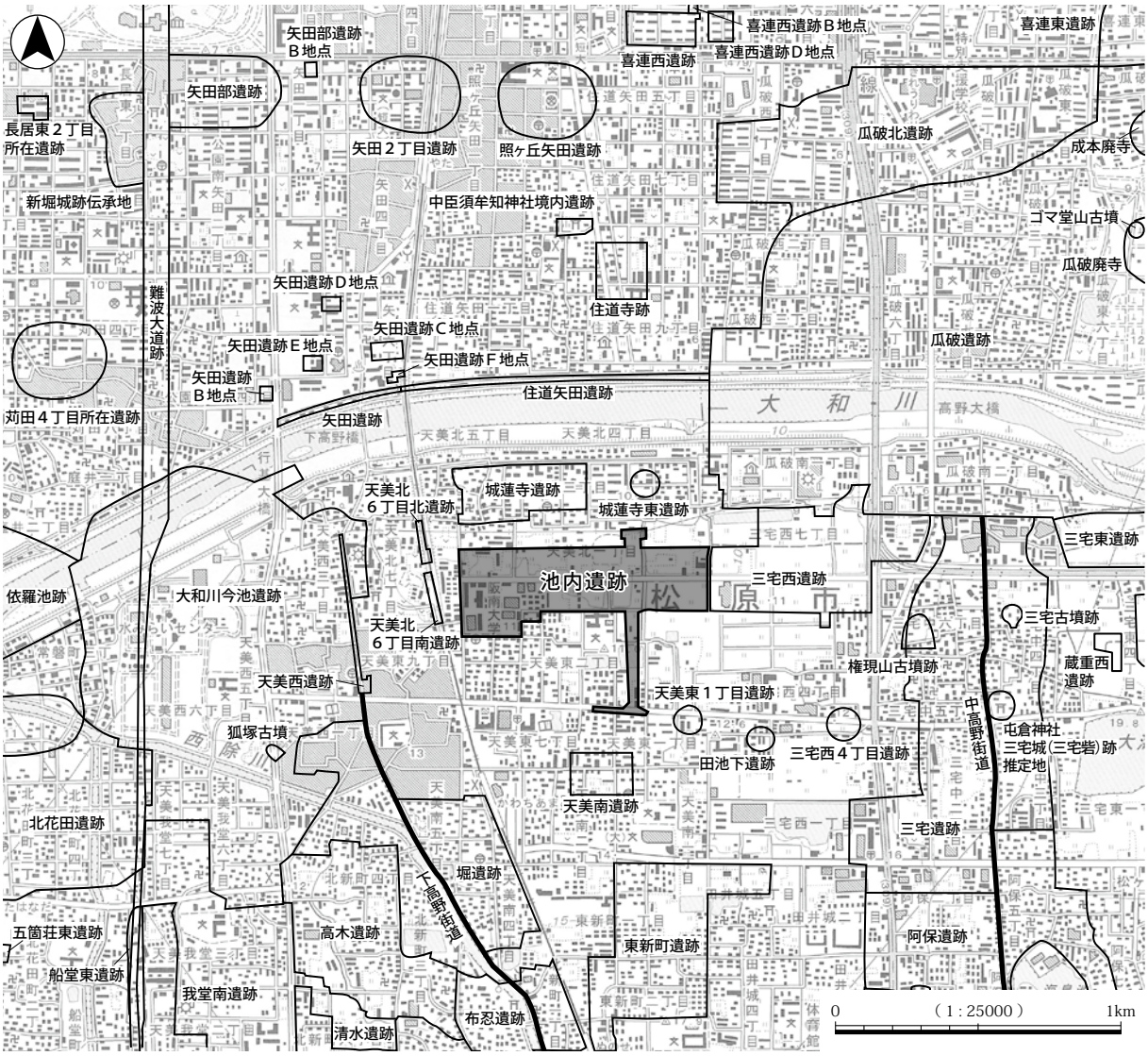
古墳時代　大和川今池遺跡では、前期および後期を中心に竪穴建物や掘立柱建物などが検出され、遺物も豊富で、韓式系土器や埋没古墳に伴う家形埴輪や円筒埴輪なども出土した。三宅西遺跡では、前期

から中期にかけての流路から大量の土器が出土し、その中には出土例の少ない百済土器も含まれている。池内遺跡でも中期を中心とする土坑や井戸・溝が検出され、これらの遺構からは土器がまとまって出土した。また、依羅池は『記紀』にその存在が記されており、その造営および「依網屯倉」の設置は、古墳時代中期に遡る可能性も指摘されている。

古代　池内遺跡では、東側・中央部・西側の大きく３つの地点で掘立柱建物から構成される居住域が確認されている。特に西側の居住域は区画溝を備えており、その内側では庇付の大型建物が３棟、それに付属する小型建物が 32 棟検出されている。掘立柱建物以外にも井戸や土坑墓が検出されており、屋敷地の形態をとる。遺物では土師器や黒色土器のほかに、緑釉陶器・灰釉陶器・銙帯などの希少遺物が出土しており、在地有力層の存在が推定される。９世紀後半から 10 世紀にかけてのものである。

大和川今池遺跡では、飛鳥時代の掘立柱建物、奈良時代の水田、平安時代の掘立柱建物などが検出されている。特筆すべきは、古代の官道である「難波大道」が検出されていることである。難波大道は難波宮の朱雀大路から直線で南下し、大津道（長尾街道）や丹比道（竹内街道）と連絡する。

また、池内遺跡の周辺には条里型地割が良好に残っており、当遺跡内でもこれに関連付けられる溝が



（大阪府地図情報システムの地図データをもとに、国土地理院「大阪東南部」S=1/25000　2007 年 12 月 1 日発行に加筆）

図３　遺跡分布図

現在までの調査で検出されている。池内遺跡以外に、条里型地割に関連する遺構がみられる遺跡として、高木遺跡では、難波大道から東へ1里に合致する里境が確認され、検出された奈良時代の水田や掘立柱建物などの配置も条里型地割に合致していた。なお高木遺跡は、奈良時代から平安時代の大型掘立柱建物が検出され、海獣葡萄鏡や陶硯なども出土していることから、官衙や居館となる可能性が想定されている。堀遺跡では、奈良時代の水田には条里型地割が認められないものの、8世紀後半から9世紀前半にかけての水田には条里型地割に基づいた様相が窺える。このように池内遺跡の南西側を中心とした地域では、8世紀後半から9世紀前半の間に条里型地割がみられるようになる。一方、池内遺跡の北東側、瓜破北遺跡の周辺では、平安時代前半頃までは条里型地割が遡れるようだが、さらにどこまで遡れるかについては、まだ検討が必要とされている。

中世　平安時代末以降、池内遺跡周辺では新田開発が活発化する。大和川今池遺跡では、掘立柱建物・井戸・土坑・溝・水田・瓦溜などが検出され、濠で囲まれた内側に大型掘立柱建物2棟や木樋を井筒とする井戸などが検出された居館も確認されている。天美西遺跡では平安時代末の柱穴群・土坑・溝が検出されている。苅田4丁目所在遺跡では、鋳造工房関連遺構や井戸・土坑が密集して検出され、15世紀から16世紀初頭にかけての遺物が多く出土している。

第3章　調査の方法

松原市教育委員会には『発掘調査記録取扱い基準』、当センターには『遺跡調査基本マニュアル』という、現地調査および整理作業のマニュアルが存在している。これらをもとに現地調査は主に当センターの方式に準じて、調査成果として残るものの表記や保管収納に関しては、保管先である松原市教育委員会に近い方式をとることとした。

（1）現地調査

調査名　松原市教育委員会での保管方法などを考慮し、遺跡名と松原市が付与する調査番号を併記することとした。松原市では、市域を1区画あたり東西800m、南北600mの範囲をもって、東西に8区画、南北に9区画の大地区を設け、西から東へA～H、北から南へ1～9の区画記号を与えている。1つの大地区はさらに東西400m、南北300mで細分され、小地区が設けられている。発掘調査に際しては、これらの地区の次に調査業務発生順の業務番号を付与しており、大地区番号－小地区番号－業務番号で調査番号を表記している。今回の調査名は、池内遺跡（Ｃ２－４－６）となる。

地区割　世界測地系（測地成果2011）による平面直角座標系第Ⅵ系を基準とし、図4に示すⅠ～Ⅵ段階の区画を設定している。今回の調査区の第Ⅰ区画－第Ⅱ区画－第Ⅲ区画は、Ｆ５－16－20Aである。遺物の取り上げ作業もこの座標系に基づいており、第Ⅰ～Ⅳ区画を用いて、遺構・層位ごとに取り上げた。取り上げた遺物には、当センター規定のラベルを添付し、調査名・地区割・層位／遺構面・遺構名・出土年月日・登録番号を記した。

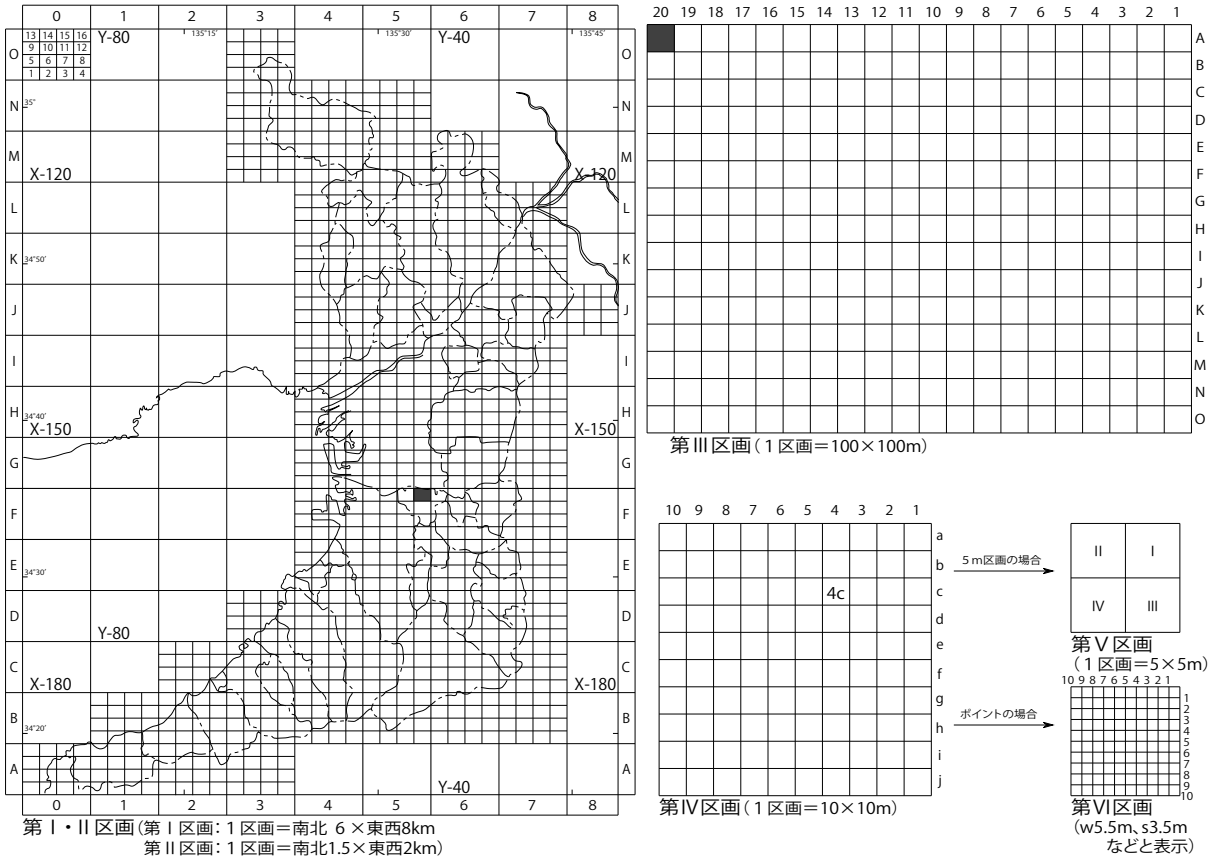
掘削方法　盛土および近世から現代の耕作土層、既設構造物による攪乱などを重機で掘削した後、以下の地層は人力によって掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

記録作業　遺構の図面は、全体図を100分の1、断面図を10分の1または20分の1の縮尺で適宜

作成した。また、空中写真測量により、50 分の 1 ・100 分の 1 の遺構図・平面図も作成し、併せて斜め写真の撮影をおこなった。

現地調査における写真撮影には、主にデジタルカメラ（Nikon D80）を用い、全景写真や一部の遺構については６×７白黒フィルム・リバーサルフィルムを用いた。また、高所作業車による全景写真撮影もおこなった。撮影に際しては、調査名・調査区・内容・撮影方向・撮影日・撮影者を記した当センター規定のラベルを、デジタルカメラにより写し込んでいる。

遺構名　松原市で使用している遺構名称に従い、遺構の種類に関わらずアルファベットの S に続き遺構の検出順に、３桁の１からの通し番号を付与し、この番号の前に遺構の種類を表記した。



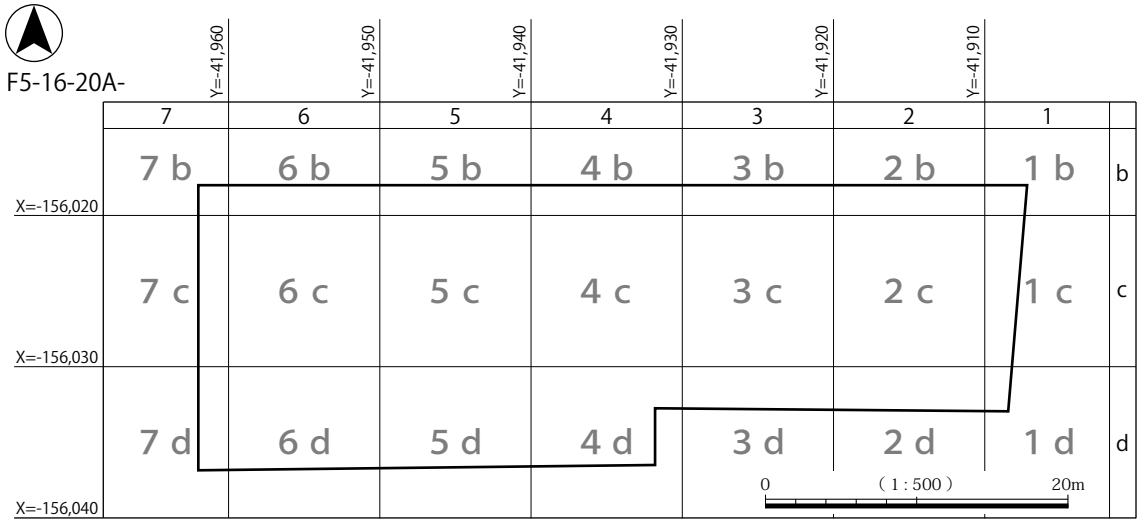


図４　地区割図

写真１　現地調査および整理作業風景

基礎整理作業　現地調査期間中にも遺物の洗浄・注記・登録の基礎整理作業をおこなっている。遺物への注記は「Ｃ２－４－６　登録番号」とした。

（２）整理作業

遺構については、現地で作成した実測図面および空中写真測量によって得られたデータを整理し、Adobe 社製の PhotoshopCS6・IllustratorCS6 を用いて作図・トレースをおこなった。

遺物は、55 × 35 × 15㎝のコンテナで 1 箱出土した。この整理作業についても、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に基づき接合・実測・写真撮影を実施した。遺物のトレースにおいても Adobe 社製の PhotoshopCS6・IllustratorCS6 を使用した。

また、これらの作業と並行し、Microsoft 社の Excel を用いて、出土遺物の登録台帳および遺構写真の写真台帳、遺構図面・遺物図面台帳を作成した。遺構図面・遺物図面は図面種類ごとに整理した上で図面番号を付与し、番号順に図面ケースに収納している。

写真図版に関しては、主としてデジタルカメラにより撮影した遺構・遺物から、報告書に掲載するものを選別し、デジタルデータ化して作成した。

出土遺物は、報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、掲載遺物には挿図番号や写真図版番号を記した当センター規定のラベルを添付した上で、掲載順にコンテナへ収納した。

上記の作業と並行して、報告書の文章を執筆し、Adobe 社の InDesignCS6 を用いて編集し、報告書を完成させた。

以上の調査成果品並びに空中写真測量成果品は、整理作業完了後に松原市教育委員会に引き渡した。今後は松原市教育委員会によって保管され、活用されることとなる。

第４章　調査成果

第１節　基本層序

調査着手前の地盤高は T.P. ＋ 10.0 ～ 10.2m で、厚さ 75 ～ 95㎝の盛土が堆積している。

第１層は、T.P. ＋ 9.0 ～ 9.5 mにかけてみられる、主として上位が厚さ５～ 25㎝の黄灰色シルト質砂、下位が厚さ 10 ～ 15㎝の黄褐色～明黄褐色砂質シルトからなる層。近世から現代にかけての耕作土およびその床土と考えられる。調査着手前の時点で削平を受けており、削平が特に深くまで及んでいる調査区中央部から東側にかけては厚さ 10㎝程度が残存するのみで、残存する層の多くは床土部分と考えられる。調査区東側では、この床土層中に間在する灰オリーブ色シルト質砂の存在が明確になるが、これが近世の耕作土に該当する可能性も考えられる。第１層および現代水路に伴う攪乱部分については機械で掘削した。

第２層は、T.P. ＋ 9.05 ～ 9.15 mにかけてみられる、主として上位が厚さ８㎝程度のマンガン斑が顕著なにぶい黄色シルト質砂と黄褐色砂質シルトのブロック、下位が厚さ５㎝程度の黄褐色シルトからなる層。中世の耕作土およびその床土と考えられる。調査区西端部にはみられない。弥生時代から中世までの遺物を包含している。当層を人力で掘削し、遺構・遺物の検出に努めたところ、その下面にて耕作に関連する溝や土坑などの遺構を検出した。出土遺物や隣接地での調査成果から、古墳時代から中世までの各時期の遺構であると考えられる。

第３層は、T.P. ＋ 8.9 ～ 9.15 mにかけてみられる、主として上位が厚さ５～ 10㎝のオリーブ褐色～褐色砂質シルトおよび褐色シルト質砂、下位が厚さ５～ 15㎝のにぶい黄褐色～明黄褐色シルトからなる層。第３層上位は、その上下にみられる層と比較してやや暗色がかっており、土壌化しているものと

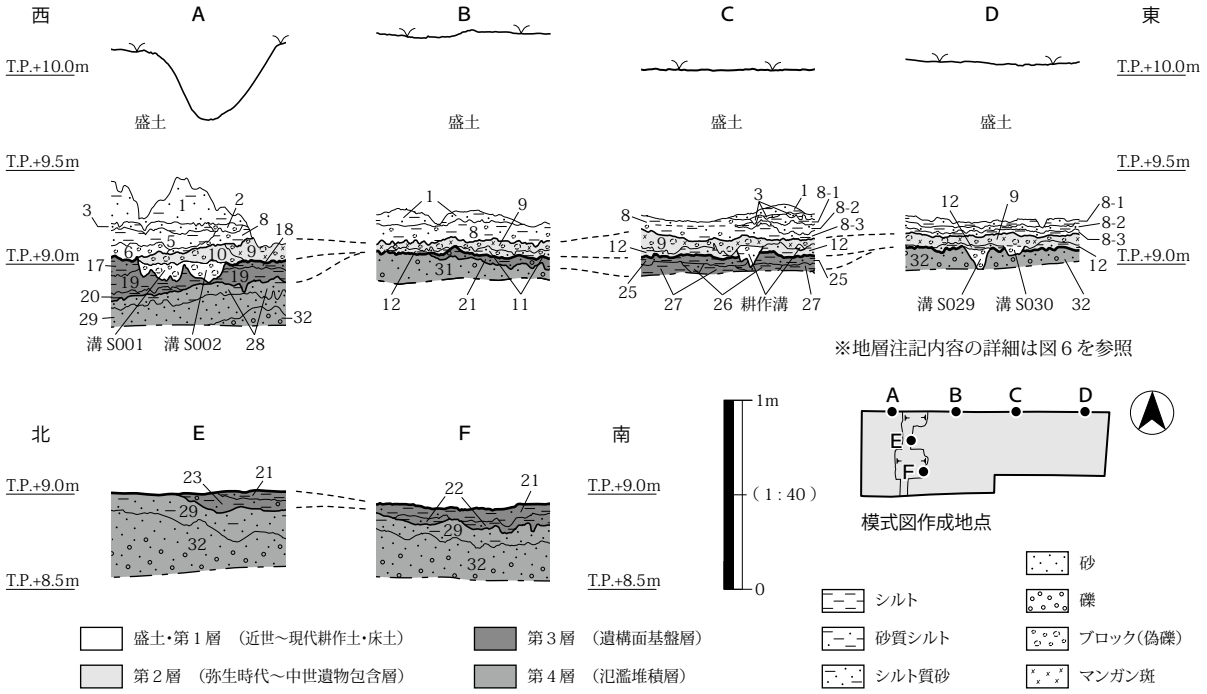
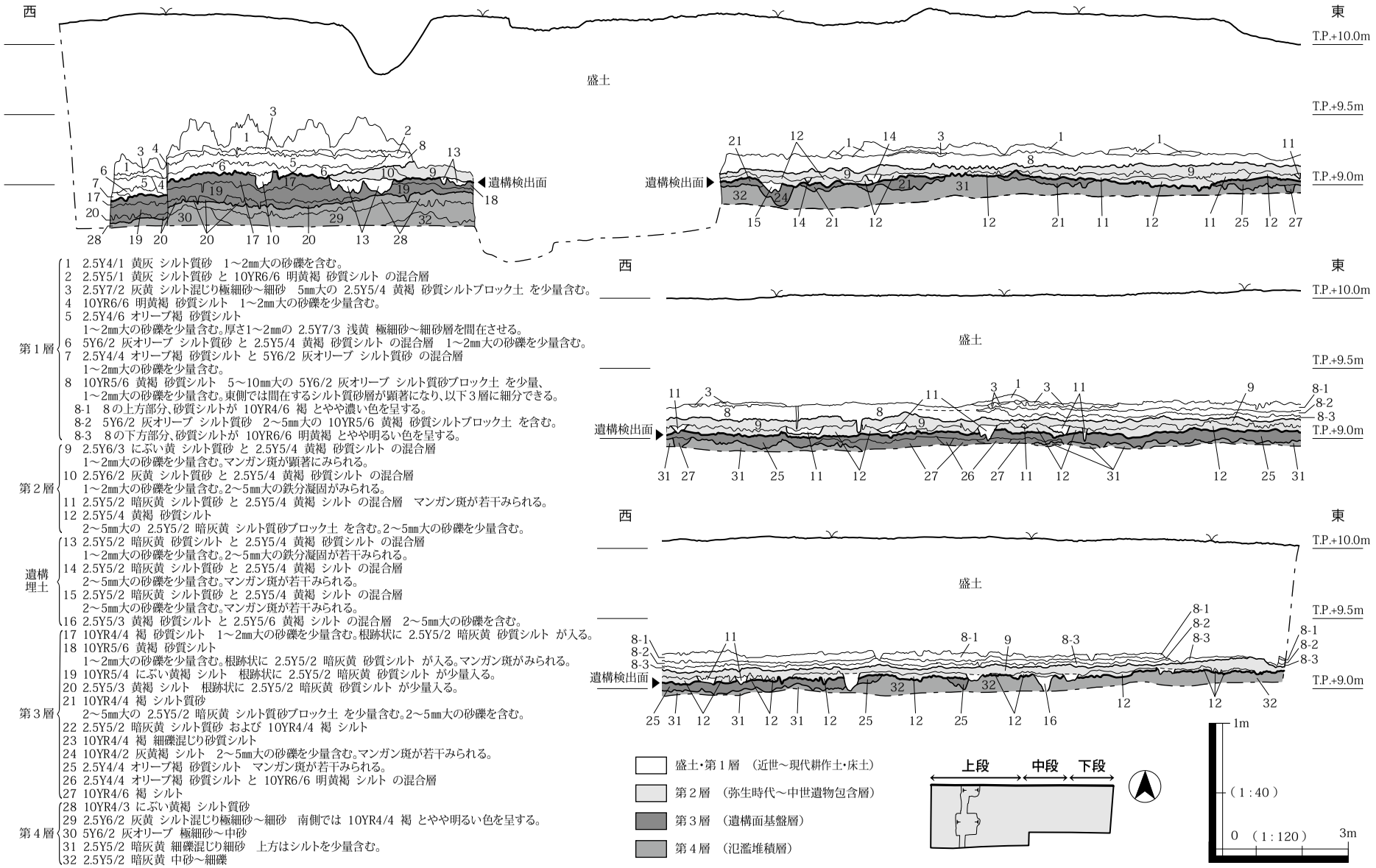


図５　基本層序模式図



第１層
1 2.5Y4/1 黄灰 シルト質砂 1～2㎜大の砂礫を含む。
2 2.5Y5/1 黄灰 シルト質砂 と 10YR6/6 明黄褐 砂質シルト の混合層
3 2.5Y7/2 灰黄 シルト混じり極細砂～細砂 5㎜大の 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルトブロック土 を少量含む。
4 10YR6/6 明黄褐 砂質シルト 1～2㎜大の砂礫を少量含む。
5 2.5Y4/6 オリーブ褐 砂質シルト
1～2㎜大の砂礫を少量含む。厚さ1～2㎜の 2.5Y7/3 浅黄 極細砂～細砂層を間在させる。
6 5Y6/2 灰オリーブ シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト の混合層 1～2㎜大の砂礫を少量含む。
7 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト と 5Y6/2 灰オリーブ シルト質砂 の混合層
1～2㎜大の砂礫を少量含む。
8 10YR5/6 黄褐 砂質シルト 5～10㎜大の 5Y6/2 灰オリーブ シルト質砂ブロック土 を少量、
1～2㎜大の砂礫を少量含む。東側では間在するシルト質砂層が顕著になり、以下３層に細分できる。
8-1 8の上方部分、砂質シルトが 10YR4/6 褐 とやや濃い色を呈する。
8-2 5Y6/2 灰オリーブ シルト質砂 2～5㎜大の 10YR5/6 黄褐 砂質シルトブロック土 を含む。
8-3 8の下方部分、砂質シルトが 10YR6/6 明黄褐 とやや明るい色を呈する。

第２層
9 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト の混合層
1～2㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑が顕著にみられる。
10 2.5Y6/2 灰黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト の混合層
1～2㎜大の砂礫を少量含む。2～5㎜大の鉄分凝固がみられる。
11 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト の混合層 マンガン斑が若干みられる。
12 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト
2～5㎜大の 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂ブロック土 を含む。2～5㎜大の砂礫を少量含む。

遺構埋土
13 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルト と 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト の混合層
1～2㎜大の砂礫を少量含む。2～5㎜大の鉄分凝固が若干みられる。
14 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト の混合層
2～5㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑が若干みられる。
15 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト の混合層
2～5㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑が若干みられる。
16 2.5Y5/3 黄褐 砂質シルト と 2.5Y5/6 黄褐 シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を含む。

第３層
17 10YR4/4 褐 砂質シルト 1～2㎜大の砂礫を少量含む。根跡状に 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルト が入る。
18 10YR5/6 黄褐 砂質シルト
1～2㎜大の砂礫を少量含む。根跡状に 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルト が入る。マンガン斑がみられる。
19 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト 根跡状に 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルト が少量入る。
20 2.5Y5/3 黄褐 シルト 根跡状に 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルト が少量入る。
21 10YR4/4 褐 シルト質砂
2～5㎜大の 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂ブロック土 を少量含む。2～5㎜大の砂礫を含む。
22 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 および 10YR4/4 褐 シルト
23 10YR4/4 褐 細礫混じり砂質シルト
24 10YR4/2 灰黄褐 シルト 2～5㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑が若干みられる。

第４層
25 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト マンガン斑が若干みられる。
26 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト と 10YR6/6 明黄褐 シルト の混合層
27 10YR4/6 褐 シルト
28 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質砂
29 2.5Y6/2 灰黄 シルト混じり極細砂～細砂 南側では 10YR4/4 褐 とやや明るい色を呈する。
30 5Y6/2 灰オリーブ 極細砂～中砂
31 2.5Y5/2 暗灰黄 細礫混じり細砂 上方はシルトを少量含む。
32 2.5Y5/2 暗灰黄 中砂～細礫

図６ 北壁地層断面図

考えられる。第２層形成時の耕作による削平を受けているためか、調査区東端部ではみられない。また、第４層の上面には凹凸があり、その凹みにたまるように堆積しているため、厚さは一定しないが、大局的にみて西側の方が厚くなる。当層上面で検出した遺構や隣接地での調査成果から、弥生時代から古代（奈良時代または平安時代前半頃まで）にかけて土壌化しつつ堆積した層と考えられる。今回の調査では、当層以下で遺物や遺構が認められなかったことから、当層上面で調査を終了している。

第４層は、その上面がT.P. ＋ 8.8 ～ 9.15 mにかけてみられる、暗灰黄色～灰黄色の細砂～細礫からなる層で、下方ほど細礫が多くなり粗粒が目立つ。調査区西側の攪乱部で確認したところ、厚さ 50㎝以上認められ、その下限は不明である。氾濫堆積による水成層と考えられる。

第２節　遺構と遺物

第１項　遺構

第２層を除去した段階で顕著に遺構が検出されたことから、第２層下面を遺構面として調査した。なお、第３層以下では遺物・遺構を確認できなかったため、今回の調査は、この１面の調査をもって終了している。

第２層下面は、東側がT.P. ＋ 9.1 m、西側がT.P. ＋ 9.0 mと、東側から西側にかけて緩やかに下がる傾斜をもつ。この面では、主として溝やピット・土坑などの遺構が検出されたが、これらの検出状況の違いから、①およそＹ＝－ 41,945 より西側、ほぼ南北正方位に伸びる溝やピットが検出された調査区西側、②Ｙ＝－ 41,945 からＹ＝－ 41,920 を中心として北北西－南南東に伸びる耕作に関わるであろう溝が多数検出された調査区中央部、③Ｙ＝－ 41,920 より東側、ほぼ南北正方位に伸びる溝が 2.2 ～ 2.8 m間隔で検出された調査区東側と、調査区を大きく３つに区分できる。以下、この区分ごとにその内容を記述する。

［調査区西側］（図７、図版２）

調査区西側は現代の水路が設けられ、その攪乱のために不明な部分も多いが、ほぼ南北正方位に伸びる溝４条と、その周囲で径 10 ～ 20㎝程度の小規模なピットを多数検出した。坪境の存在が推定されている地点（第５章　図 10 参照）でこれらの溝が検出されており、特に他より規模の大きい溝 S001 などは、坪境として区画の役割を果たしていた可能性も考えられる。

坪境をもって東西で土地利用の在り方が異なっていたためか、溝 S001 よりさらに西側では遺構が極めて希薄となり、顕著な遺構は土坑 S003 程度となる。

ほとんどの遺構が遺物を伴っておらず、その正確な時期比定は難しいが、溝の多くが第２層の形成以前であるのに対し、ピットには第２層でも上位の耕作土に由来するブロック土を含むものもみられることから、ピットの中には溝よりも新しいものが存在すると考えられる。

溝 S001（図８）

20A－６ｃ・ｄで検出した。幅 70㎝、深さ 9㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。調査区北壁の地層観察から、第２層形成以前の溝とみられる。また、溝 S002 を切っており、この遺構より新しいものと考えられる。ブロック状の暗灰黄色シルト質砂と黄褐色シルトが堆積している。埋土からは、黒色土器Ａ類・土師器の細片が出土した。

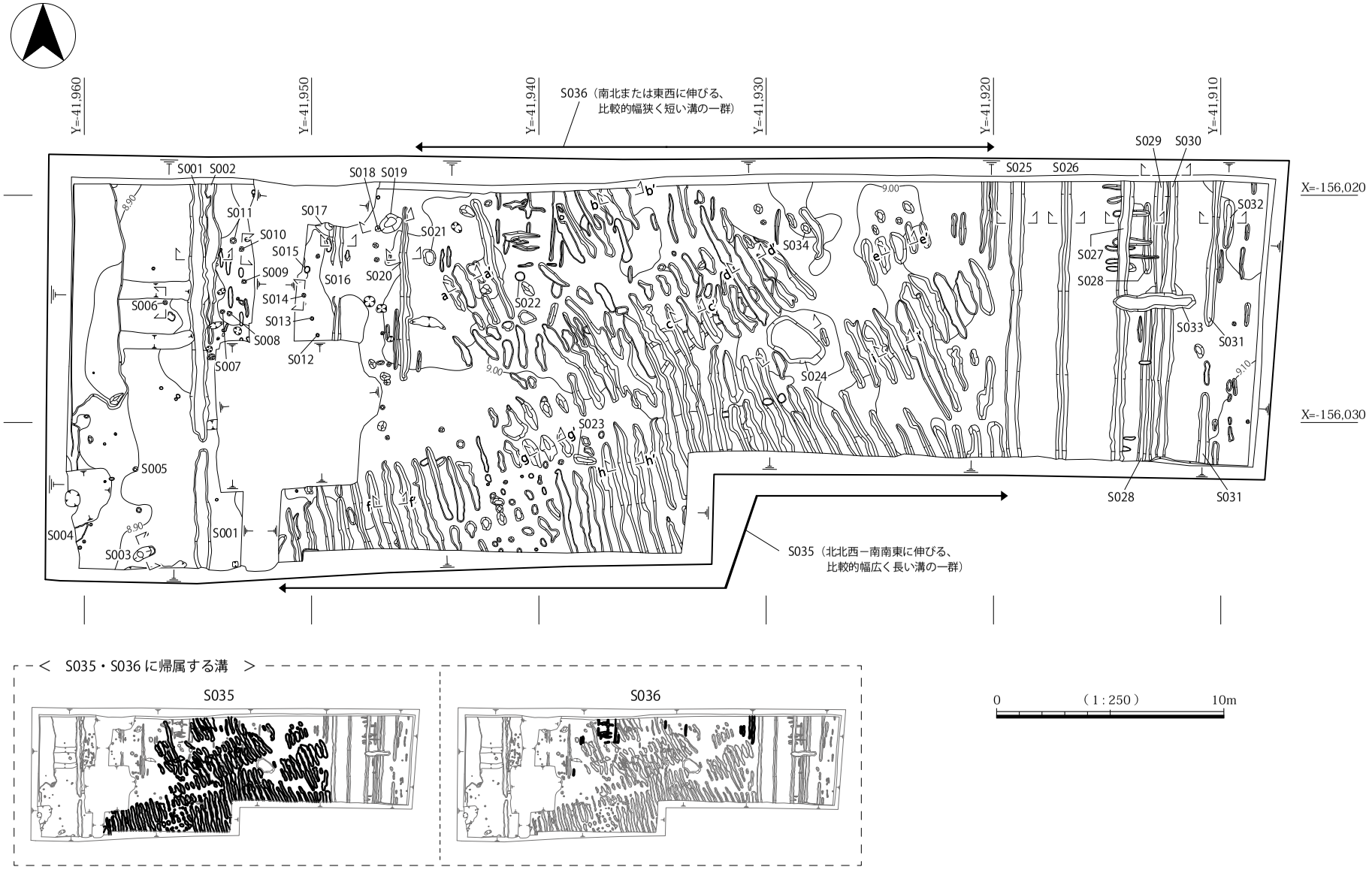

Y=-41,960
Y=-41,950
Y=-41,940
Y=-41,930
Y=-41,920
Y=-41,910
X=-156,020
X=-156,030
S036（南北または東西に伸びる、
比較的幅狭く短い溝の一群）
S035（北北西－南南東に伸びる、
比較的幅広く長い溝の一群）
S001
S002
S003
S004
S005
S006
S007
S008
S009
S010
S011
S012
S013
S014
S015
S016
S017
S018
S019
S020
S021
S022
S023
S024
S025
S026
S027
S028
S029
S030
S031
S032
S033
S034
8.90
9.00
9.10
＜ S035・S036 に帰属する溝 ＞
S035
S036
0
（1：250）
10m

図７　遺構平面図

溝 S002（図８）

20A －６ｃで検出した。幅 55㎝、深さ 7㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。調査区北壁の地層観察から、第２層形成以前の溝とみられる。また、溝 S001 に切られており、この遺構より古いものと考えられる。ブロック状の黄褐色シルトと暗灰黄色シルト質砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

溝 S016（図８）

20A －５ｃで検出した。幅 36㎝、深さ 8㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。ブロック状の黄灰色シルト質砂と黄褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

溝 S020（図８）

20A －５ｃで検出した。幅 30㎝､深さ 11㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。調査区北壁の地層観察から、第２層形成以前の溝とみられる。下位には黄褐色シルト混じり細砂、上位にはブロック状の暗灰黄色シルト質砂と黄褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

土坑 S003（図８、図版３）

20A －６ｄで検出した。長軸 100㎝、短軸 45㎝の楕円形を呈し、深さ 63㎝。下位は黄灰色砂質シルトを主体として、ブロック状の黄褐色シルトとにぶい黄褐色細砂が散見され、中位は褐灰色シルト、上位は顕著なブロック状の黄灰色砂質シルトと黄褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

類似した堆積状況をみせる遺構が池内遺跡Ｃ２－４－２調査のⅠ－ｂ２区で検出されており、それらが弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺構であることや、本調査の第２層中にも当該期の遺物が少なからず認められることから、その時期の遺構である可能性も考えられる。

土坑 S019（図８、図版３）

20A －５ｃで検出した。長軸 103㎝、短軸 78㎝の楕円形を呈し、深さ 17㎝。ピット S018 に切られており、この遺構より古いものと考えられる。ブロック状の灰黄色細砂と黄褐色シルト混じり細砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

ピット S006（図８）

20A －６ｃで検出した。直径 12㎝の円形を呈し、深さ 13㎝。炭粒を含む灰黄褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

ピット S010（図８）

20A －６ｃで検出した。長軸 20㎝、短軸 17㎝の方形を呈し、深さ 17㎝。ブロック状の黄灰色シルト質砂と黄褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

ピット S014（図８）

20A －６ｃで検出した。長軸 18㎝、短軸 14㎝の円形を呈し、深さ 7㎝。ブロック状の黄灰色シルト混じり極細砂～細砂と黄褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

ピット S018（図８、図版３）

20A －５ｃで検出した。長軸 26㎝、短軸 19㎝の円形を呈し、深さ 7㎝。土坑 S019 を切っており、この遺構より新しいものと考えられる。ブロック状の暗灰黄色シルト質砂と黄褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

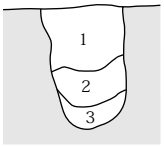
［調査区中央部］（図７、図版２）

調査区中央部ではピットや土坑は少なくなり、北北西－南南東に伸びる幅広く長い耕作溝群と、東西

西 溝 S001・S002 東 T.P.+9.1m

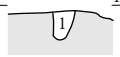
溝 S001
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 10YR5/6 黄褐 シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を少量含む。
溝 S002
2 10YR5/6 黄褐 シルト と 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 の混合層 2～5㎜大の砂礫を少量含む。

北西 土坑 S003 南東 T.P.+9.0m



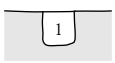
土坑 S003
1 2.5Y5/1 黄灰 砂質シルト と 10YR5/6 黄褐 シルト の混合層
2 10YR4/1 褐灰 砂質シルト
3 2.5Y5/1 黄灰 砂質シルト と 10YR5/6 黄褐 シルト、10YR5/3 にぶい黄褐 細砂 の混合層

南 ピット S006 北 T.P.+9.0m



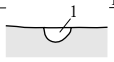
ピット S006
1 10YR4/2 灰黄褐 シルト 2～5㎜大の炭粒を含む。

北 ピット S010 南 T.P.+9.1m



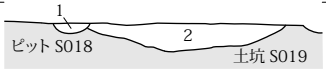
ピット S010
1 2.5Y5/1 黄灰 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト の混合層

南 ピット S014 北 T.P.+9.1m



ピット S014
1 2.5Y5/1 黄灰 シルト混じり極細砂～細砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト の混合層

西 ピット S018・土坑 S019 東 T.P.+9.1m

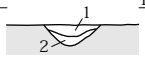


ピット S018
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑が若干みられる。
土坑 S019
2 2.5Y6/2 灰黄 細砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト混じり細砂 の混合層

西 溝 S016 東 T.P.+9.1m

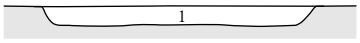
溝 S016
1 2.5Y5/1 黄灰 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑がみられる。

西 溝 S020 東 T.P.+9.1m



溝 S020
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を含む。マンガン斑がみられる。
2 2.5Y5/3 黄褐 シルト混じり細砂

南西 土坑 S024 北東 T.P.+9.1m

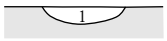


土坑 S024
1 2.5Y5/1 黄灰 シルト質砂 と 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を含む。マンガン斑がみられる。

西 溝 S025 東 T.P.+9.2m

溝 S025
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 シルト の混合層 マンガン斑が若干みられる。

西 溝 S026 東 T.P.+9.2m

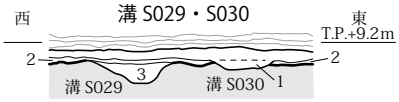


溝 S026
1 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト の混合層 1～2㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑が顕著にみられる。

西 溝 S027・S028 東 T.P.+9.2m

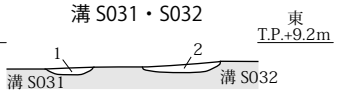
溝 S027
1 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト の混合層 1～2㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑が顕著にみられる。
溝 S028
2 2.5Y5/3 黄褐 砂質シルト と 2.5Y5/6 黄褐 シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を含む。

西 溝 S029・S030 東 T.P.+9.2m

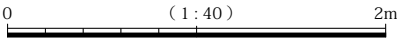


溝 S030
1 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト の混合層 1～2㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑が顕著にみられる。
第２層
2 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト 2～5㎜大の 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂ブロック土 を含む。2～5㎜大の砂礫を少量含む。
溝 S029
3 2.5Y5/3 黄褐 砂質シルト と 2.5Y5/6 黄褐 シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を含む。

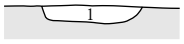
西 溝 S031・S032 東 T.P.+9.2m



溝 S031
1 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト質砂 と 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト の混合層 1～2㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑が顕著にみられる。
溝 S032
2 2.5Y5/1 黄灰 シルト質砂 と 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を含む。

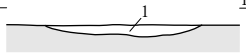


西 耕作溝群 S035 a-a′ 東 T.P.+9.1m



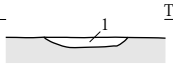
耕作溝群 S035 a-a′ 断面
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y4/6 オリーブ褐 砂質シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を少量含む。下方はマンガン斑が若干みられる。

南西 耕作溝群 S035 b-b′ 北東 T.P.+9.1m



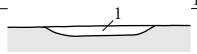
耕作溝群 S035 b-b′ 断面
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y4/6 オリーブ褐 砂質シルト、2.5Y5/4 黄褐 シルト質砂 の混合層

西 耕作溝群 S035 c-c′ 東 T.P.+9.1m



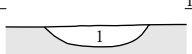
耕作溝群 S035 c-c′ 断面
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト の混合層

西 耕作溝群 S035 d-d′ 東 T.P.+9.1m



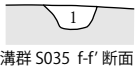
耕作溝群 S035 d-d′ 断面
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を少量含む。

西 耕作溝群 S035 e-e′ 東 T.P.+9.1m



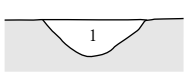
耕作溝群 S035 e-e′ 断面
1 耕作溝群 S035 d-d′の1層に同じ。

西 耕作溝群 S035 f-f′ 東 T.P.+9.1m



耕作溝群 S035 f-f′ 断面
1 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルト 5～10㎜大の 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルトブロック土 を含む。

南西 耕作溝群 S035 g-g′ 北東 T.P.+9.1m

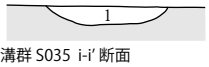


耕作溝群 S035 g-g′ 断面
1 耕作溝群 S035 c-c′の1層に同じ。

西 耕作溝群 S035 h-h′ 東 T.P.+9.1m

耕作溝群 S035 h-h′ 断面
1 2.5Y5/1 黄灰 砂質シルト と 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑がみられる。

西 耕作溝群 S035 i-i′ 東 T.P.+9.1m



耕作溝群 S035 i-i′ 断面
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質砂 と 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト の混合層 2～5㎜大の砂礫を少量含む。マンガン斑がみられる。

図８ 遺構断面図

南北の正方位に伸びる幅狭く短い耕作溝群が主たる遺構となる。前者の耕作溝群は、本調査の北側でおこなわれた都市計画道路大和川線外建設に伴う調査（池内遺跡 05-1 調査）の１区第３面で検出された耕作溝群とその様相が類似しており、一連のものである可能性が考えられる。また、後者の耕作溝群は、同調査の１区第２面、３区第３面で同様のものが検出されており、こちらの耕作溝群がより新しいものと考えられる。

これらの耕作溝群からの出土遺物は極少量であったため、その正確な時期比定は難しいが、埋土や調査区北壁の地層観察、既往の調査との対応関係などから、前者の耕作溝群は平安時代（前半か）、後者の耕作溝群は中世に帰属するものと考えられる。

耕作溝群 S035（図８、図版３）

20A －３～５ｂ～ｄで検出した北北西－南南東に伸びる多数の溝については、一括して耕作溝群 S035 と遺構名称を付与した。幅 23 ～ 82㎝、長さ 150 ～ 700㎝、深さ５～ 20㎝。主としてブロック状の暗灰黄色シルト質砂とオリーブ褐色砂質シルトが堆積している。黒色土器Ａ類・須恵器・土師器の細片が出土した。

北東－南西方向に溝の途切れる位置が揃っている箇所がみられ、何らかの耕作単位を示しているものと考えられる。相対的に北側の溝は浅く、南側の溝は深い。また分布傾向として、第３層のようなシルト質の地層が広がるところに多く、第４層のような砂礫層が高くなっている地点には、ほとんどみられない。

耕作溝群 S036（図８）

溝 S020 以東の 20A －３～５ｂ・ｃで検出した南北または東西と正方位に沿って伸びる多数の溝については、一括して耕作溝群 S036 と遺構名称を付与した。幅 13 ～ 25㎝、長さ 35 ～ 300㎝、深さ３～５㎝。主として暗灰黄色～にぶい黄色シルト質砂と黄褐色砂質シルトが堆積している。第２層でも上位の耕作土に由来するブロック土を含むものが多く、中世に帰属するものと考えられる。黒色土器Ａ類・土師器の細片が出土した。

土坑 S024（図８）

20A －３ｃで検出した。長軸 103㎝、短軸 78㎝のやや歪な楕円形を呈し、深さ 11㎝。ブロック状の黄灰色シルト質砂とオリーブ褐色砂質シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

［調査区東側］（図７、図版２）

調査区東側では、ほぼ南北正方位に伸びる溝を８条検出し、その周囲で耕作溝群 S036 と同様の南北または東西に伸びる多数の溝を検出した。ほぼ南北正方位に伸びる溝の多くは、本調査の南側でおこなわれた池内遺跡Ｃ２－４－２調査で検出されていた溝の続きである（第５章　図 10 参照）。

溝 S026・S027・S030・S031 については、第２層でも上位の耕作土に由来するブロック土が含まれており、出土した遺物からも中世に帰属するものと考えられる。溝 S025 は、埋土の違いからこれらの溝よりは若干古くなる可能性がある。溝 S029 は、第２層の下位にある床土と考えられる層よりもさらに下位の溝であるため、調査区東側で検出された溝の中では最も古くなる。ただし溝 S029 の埋土からは、黒色土器の可能性がある土器片が出土しているので、古く見積もっても平安時代前半頃までの溝と考えられる。溝 S028・S032 については、判断材料が少ないため時期の判断は難しいが、埋土の類似性から、溝 S028 は比較的古く、溝 S032 は比較的新しいものである可能性が考えられる。

溝 S025（図８）

20A －２ｂ～ｄで検出した。幅 60㎝、深さ 7㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。ブロック状の暗灰黄色シルト質砂と黄褐色シルトが堆積している。土師器の細片が出土した。

溝 S026（図８、図版３）

20A －２ｂ～ｄで検出した。幅 40㎝、深さ 9㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。ブロック状のにぶい黄色シルト質砂と黄褐色砂質シルトが堆積している。黒色土器Ｂ類・須恵器（東播系）・土師器の細片が出土した。

溝 S027（図８、図版３）

20A －２ｂ～ｄで検出した。幅 54㎝、深さ 7㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。ブロック状のにぶい黄色シルト質砂と黄褐色砂質シルトが堆積している。瓦器・黒色土器Ｂ類・須恵器・土師器の細片が出土した。

溝 S028（図８）

20A －２ｂ～ｄで検出した。幅 31㎝、深さ 6㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。ブロック状の黄褐色砂質シルトと黄褐色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

溝 S029（図８）

20A －２ｂ～ｄで検出した。幅 44㎝、深さ 10㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。溝 S030 に切られており、この遺構より古いものと考えられる。ブロック状の黄褐色砂質シルトと黄褐色シルトが堆積している。黒色土器・須恵器・土師器の細片が出土した。

溝 S030（図８）

20A －２ｂ～ｄで検出した。幅 34㎝、深さ 4㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。溝 S029 を切っており、この遺構より新しいものと考えられる。ブロック状のにぶい黄色シルト質砂と黄褐色砂質シルトが堆積している。黒色土器Ｂ類・土師器の細片が出土した。

溝 S031（図８）

20A －２ｂ～ｄで検出した。幅 24㎝、深さ 4㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。ブロック状のにぶい黄色シルト質砂と黄褐色砂質シルトが堆積している。土師器の細片が出土した。

溝 S032（図８）

20A －１ｂ～ｄで検出した。幅 40㎝、深さ 7㎝。ほぼ南北正方位に伸びる。ブロック状の黄灰色シルト質砂とオリーブ褐色砂質シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

第２項　遺物

遺物は 55 × 35 × 15㎝のコンテナで１箱分出土した。古墳時代後期から平安時代の遺物を中心として、弥生時代から中世にかけての遺物がみられる。遺構および第２層から出土したが、多くが細片であり、図化できるものは僅かであった。

図９－１～４は遺構から出土。１は溝 S001 から出土。黒色土器Ａ類椀の底部。復元底径 7.6㎝、残存高 1.3㎝。高台は断面三角形を呈する。２は溝 S026 から出土。東播系須恵器鉢の底部。残存高 3.4㎝。３は溝 S030 から出土。竈の庇部か。外側に沈線１条、内側に幅 7.5㎜の凹線がみられる。４は耕作溝群 S036 から出土。黒色土器Ａ類椀の口縁部。復元口径 16.0㎝、残存高 3.0㎝。口縁端部内面直下に沈線がみられる。

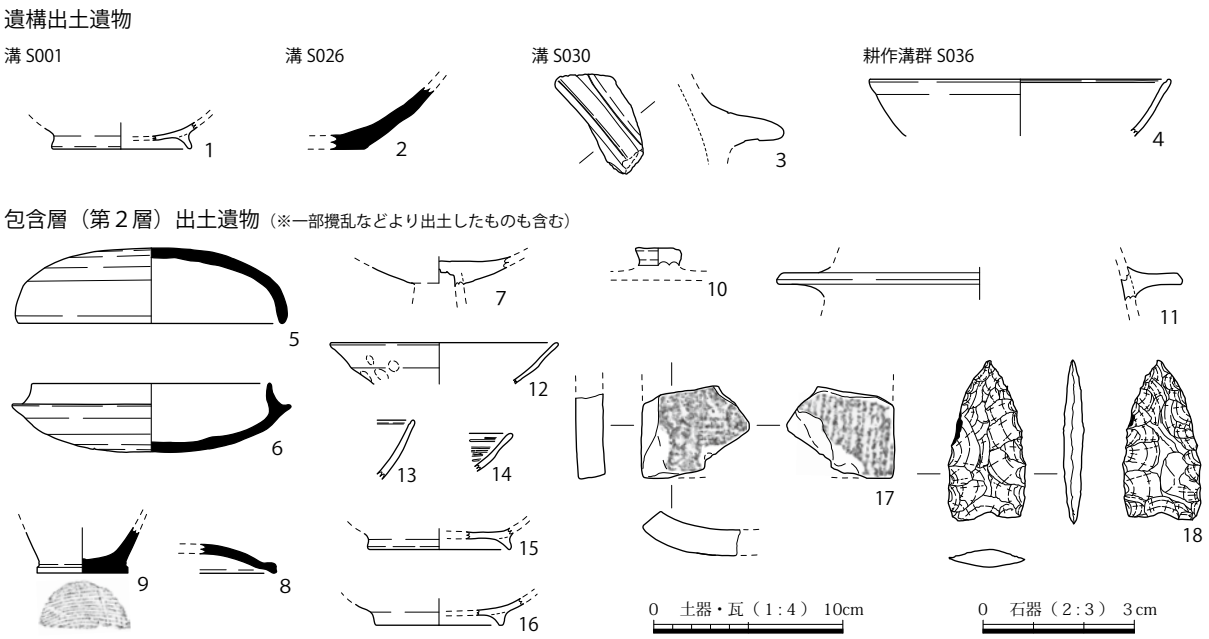


図９　出土遺物

図９－５～ 18 は主に第２層から出土。

図９－５～７は古墳時代の土器。５・６は須恵器。５は杯蓋。口径 13.8㎝、器高 4.0㎝。６は杯身。口径 12.6㎝、器高 3.7㎝。５・６いずれも６世紀後半。７は土師器高杯の杯部。残存高 1.4㎝。

図９－８～ 16 は古代の土器。８・９は須恵器。８は蓋。残存高 1.5㎝。奈良時代。９は小型壺の底部。底径 4.8㎝、残存高 2.4㎝。底部には糸切痕がみられる。平安時代。調査区中央部の攪乱内より出土。10 ～ 12 は土師器。10 は蓋のつまみ部。径 2.4㎝。残存高 0.9㎝。11 は羽釜の鍔部。残存高 1.3㎝。12 は杯の口縁部。復元口径 12.6㎝、残存高 2.2㎝。体部外面にユビオサエの痕が残る。13 ～ 16 は黒色土器。13 は黒色土器 A 類椀の口縁部。残存高 3.1㎝。機械掘削中に出土。口縁端部内面直下に沈線がみられる。14 は黒色土器 B 類椀の口縁部。残存高 2.0㎝。内面にヘラミガキを施す。15 は黒色土器 A 類椀の底部。復元底径 7.6㎝、残存高 1.1㎝。高台は断面三角形を呈する。16 は黒色土器 B 類椀の底部。復元底径 6.8㎝、残存高 1.4㎝。高台は断面三角形を呈する。側溝掘削中に出土。

図９－ 17 は瓦。外面には縄叩き痕がみられる。厚さ 1.4㎝、残存高 4.5㎝、残存幅 5.2㎝。古代。

図９－ 18 は石器。サヌカイト製の石鏃。長さ 3.2㎝、幅 1.5㎝、厚さ 0.35㎝、重さ 1.7g。基部に抉りがあり、弥生時代前期以前のものと考えられる。

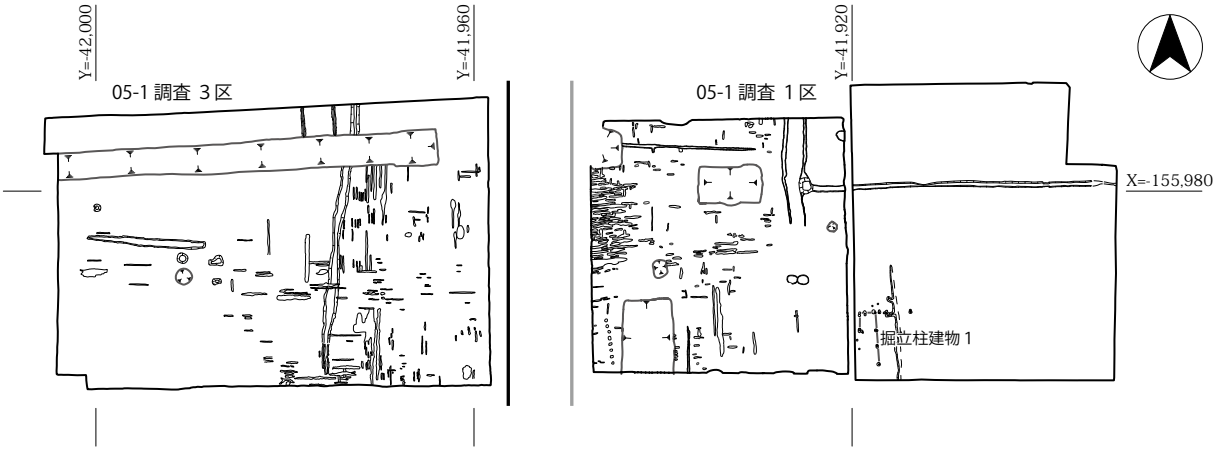
また、小片のため実測図化はしなかったが、第２層からはこの他にも青磁（26）や瓦質土器（27）、鉄製品（28）などが出土している（図版４）。

第５章　総括

今回の池内遺跡の調査では、弥生時代から中世にかけての遺物が出土し、耕作に伴うと考えられる古代から中世にかけての多数の溝や土坑・ピットを検出した。

顕著な遺構として、調査区中央部で検出した耕作溝群 S035 が挙げられる。耕作溝群 S035 のような、幅 50㎝前後の溝が群をなして、およそ等間隔に平行する遺構については、畠に伴う耕作痕の可能性が

池内 05-1 調査　1区 第2面　3区 第3面（中世）



池内遺跡C 2－4－2・6調査 遺構面、池内 05-1 調査　1区 第3面　3区 第4面（古代～中世）

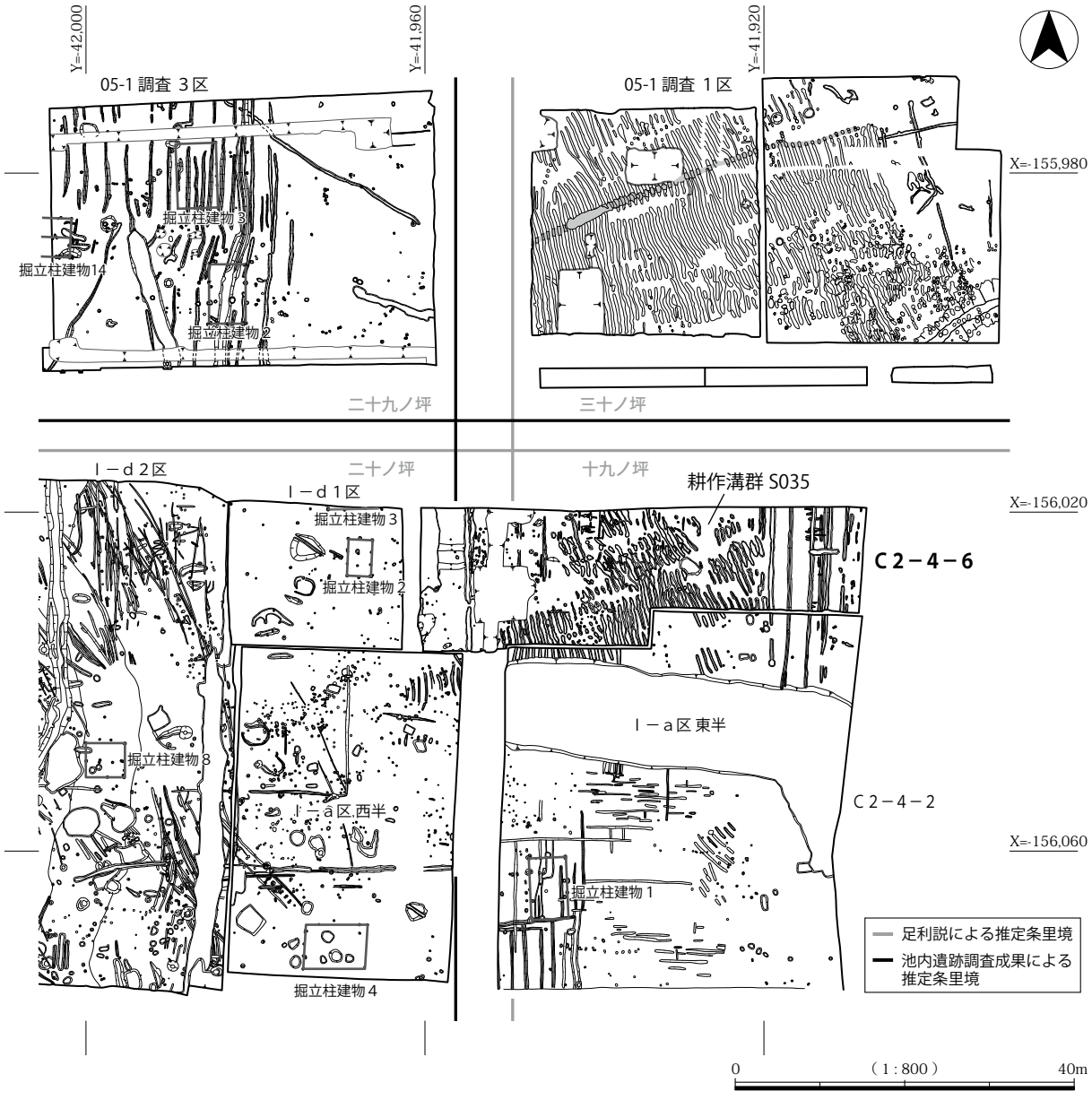


図 10　既往の調査成果との対応

考えられる。同様の遺構は、都市計画道路大和川線外の建設に伴う発掘調査でもみつかっており、畠と考えられる耕作地が東西約 60 m、南北約 70 mという広い範囲に展開されていた様相が窺える。

このように、今回検出した耕作溝群 S035 は、古代の集落景観を考える上で極めて重要となろう。そこで、既往の調査成果を参照しつつ当遺構について若干の検討をおこない、本調査のまとめとしたい。

まず、耕作溝群 S035 の年代であるが、現地調査では平安時代（前半か）と捉えた。これは、当遺構の埋土に明らかに中世と考えられるような第２層由来の土が認められなかったこと、僅かではあるが埋土より黒色土器の細片が出土したことの２点を理由とする。

しかし一方で、より遡る可能性も考えられる。つまり、①当遺跡周辺における条里型地割の施行は、８世紀後半から９世紀前半と推定されているが、耕作溝群 S035 の多くの溝がこの地割の方位に沿わないこと、②Ｃ２－４－２調査のⅠ－ａ区西半の北東部に、耕作溝群 S035 の続きになる可能性がある溝群がみられるが、もし一連のものであるならば、畠が坪境を横断してしまうこと、この２点に基づき、条里型地割の施行前と考えることもできる。

ただし、条里型地割の施行後と考えさせる特徴も同時に観察できる。つまり、①本調査区および 05-1 調査の１区・３区において、坪境の存在が推定される位置をもって、東側には斜向する耕作溝群、西側には居住域と、明確に土地利用の在り方が異なり、坪境が区画としての機能を果たしていたと考えられること、②耕作溝群 S035 も 05-1 調査の１区で検出された耕作溝群も、その多くは北北西－南南東へと伸びるが坪境に近づくにつれて、その角度を正方位に近づけていること、の２点が挙げられる。

以上のことから、まだ検討の余地は残っており拙速な結論となってしまうが、たとえば本調査で検出した耕作溝群 S035 が時期的に古く条里型地割の施行前で、05-1 調査の１区で検出した耕作溝群が新しくその施行後ということも考えられよう。この場合には、南から北へと耕作地が移っていったことが想定される。

何を栽培していたかについては、遺構埋土の一部を篩（ふるい）がけしたが、種子などの植物遺体は検出できず、現状では不明である。また、05-1 調査の３区、掘立柱建物の周囲で検出されている耕作溝群は、耕作溝群 S035 と比較して溝間の間隔が広いが、この違いは何に由来するのかなど、当遺構をめぐって検討すべき課題はまだ多くあるだろう。

これまでの池内遺跡の調査では、古代の掘立柱建物が数多く検出されてきたこともあり、居住域に関する検討は多くなされてきたが、その一方、当時の生産域については注目されてこなかった。どの居住域にどの生産域が対応するのか検討を進めることで、より具体的に古代の集落景観を復元することが期待できる。今回の発掘調査は、この生産域を考える上での有用な情報を提供した貴重な調査だったと言える。

【参考文献】

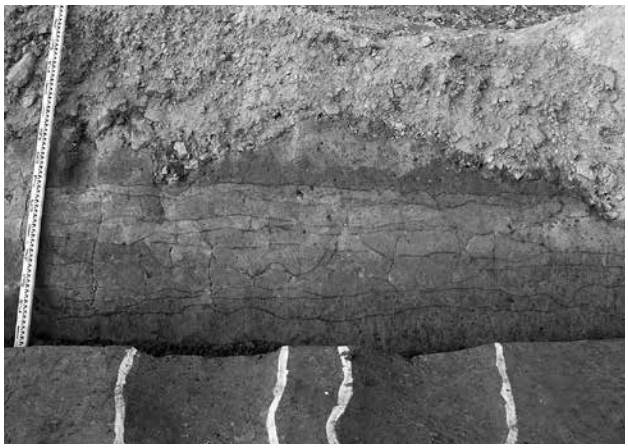
森屋美佐子・入江正則・平田洋司・新海正博・正岡大実・永田由香編　2010 『池内遺跡』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 198 集 財団法人大阪府文化財センター

芝田和也・大矢祐司・川瀬貴子　2017 『池内遺跡』松原市文化財報告第１冊 公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 282 集 松原市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター

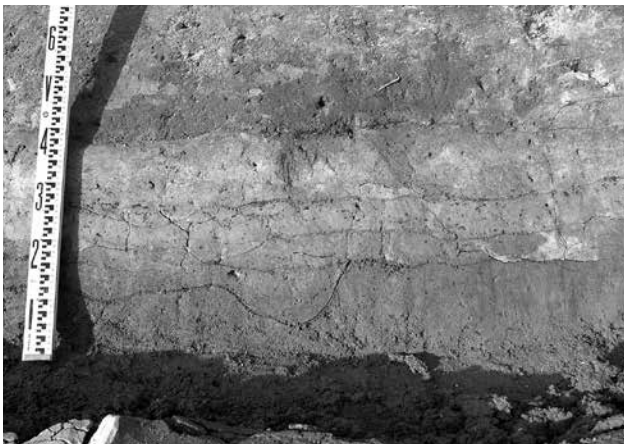
写　真　図　版

池内遺跡（Ｃ２－４－６）発掘調査 作業風景（南東から）

図版１　層序・調査区全景



1．北壁 地層断面 西側（南から）



2．北壁 地層断面 中央部（南から）

3．北壁 地層断面 東側（南から）

4．南北方向 地層断面 北側（西から）

5．調査区 全景（西から）

図版２　調査区全景

１．調査区 西側
全景（西から）

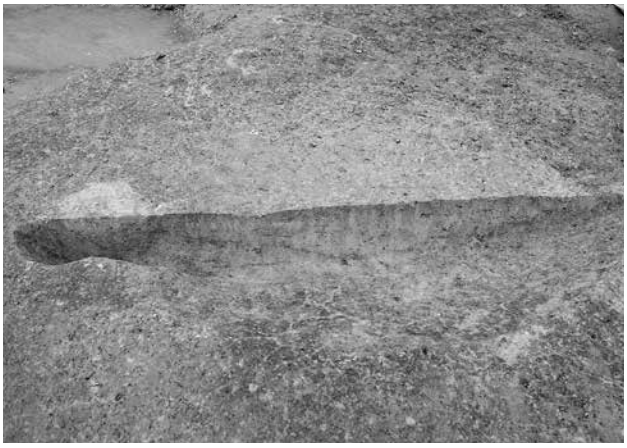
２．調査区 中央部
全景（南から）

３．調査区 東側
全景（南から）

1．調査区 中央部 遺構検出状況（南から）

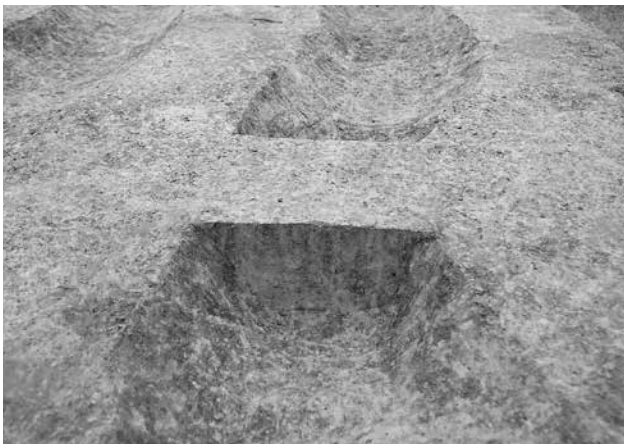
2．調査区 東側 遺構検出状況（南から）

3．土坑 S003 断面（南西から）

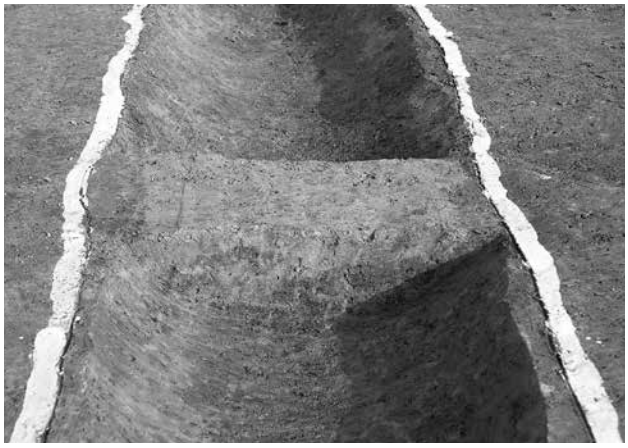


4．ピット S018・土坑 S019 断面（南東から）

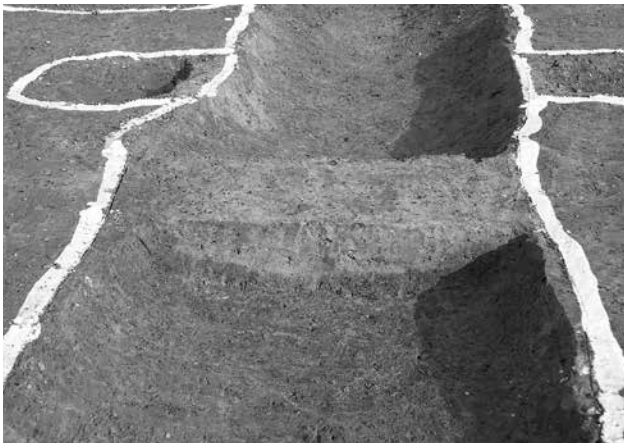
5．耕作溝群 S035 a-a’ 断面（南東から）



6．耕作溝群 S035 f-f’ 断面（南から）



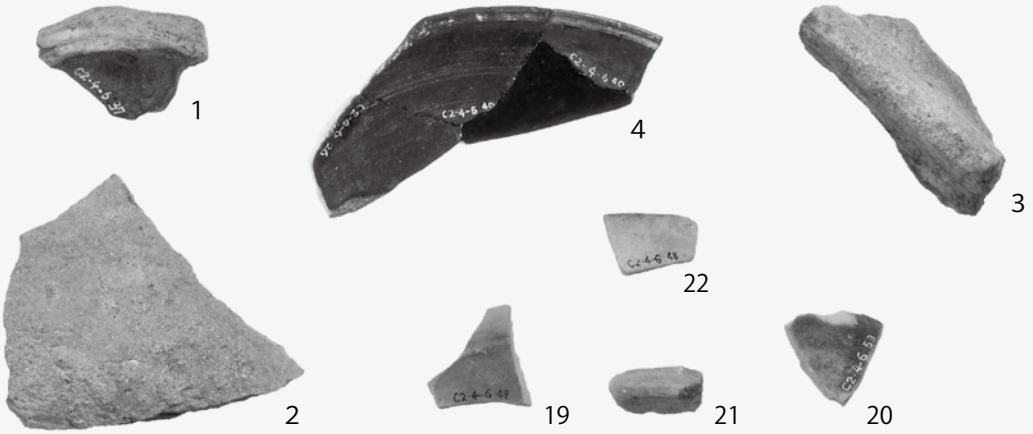
7．溝 S026 断面（南から）



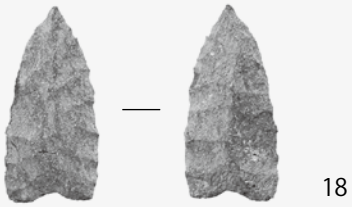
8．溝 S027 断面（南から）

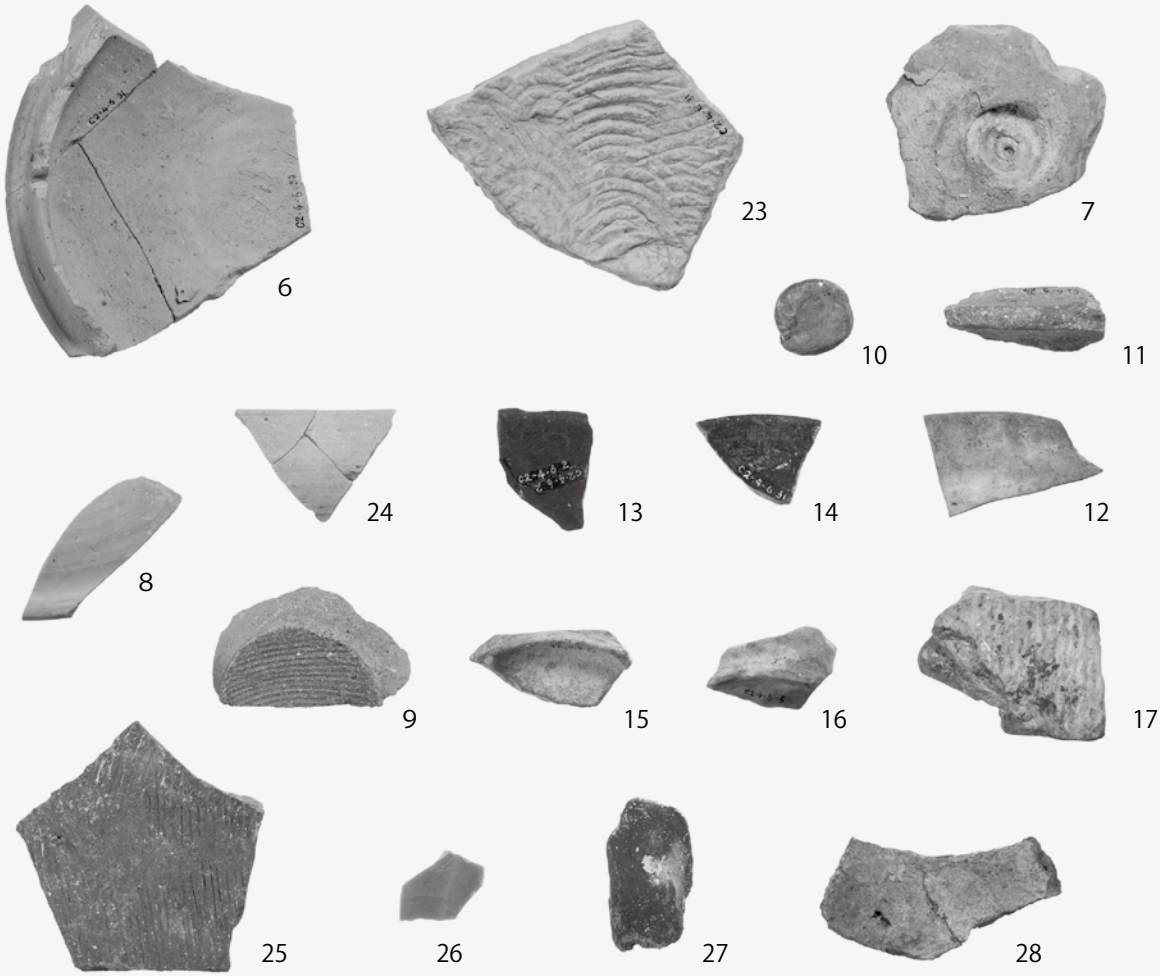
図版４　出土遺物

遺構出土遺物



包含層（第２層）出土遺物（※一部攪乱などより出土したものも含む）





報 告 書 抄 録

ふりがな	いけうちいせき
書　　名	池内遺跡
副 書 名	松原市天美東土地区画整理事業地区内における店舗建設に伴う池内遺跡（Ｃ２－４－６）発掘調査報告書
シリーズ名①	松原市文化財報告
シリーズ番号①	第２冊
シリーズ名②	公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号②	第297集
編 著 者 名	河本純一
発 行 機 関	松原市教育委員会
所 在 地	〒580-8501　大阪府松原市阿保１丁目１番１号 TEL 072-334-1550（代）　FAX 072-332-7720
編 集 機 関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所 在 地	〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号 TEL 072-299-8791　FAX 072-299-8905
発行年月日	西暦　2019年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いけうちいせき 池内遺跡	まつばらし 松原市 あまみひがし 天美東 さんちょうめ ３丁目	27217	18	34° 35′ 77″	135° 32′ 39″	2018.11.1 ～ 2018.11.30	690㎡	松原市天美東土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池内遺跡	不明	弥生以前		弥生土器・石器	
		古墳		土師器・須恵器	
	生産	古代～中世	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・磁器・瓦・鉄製品	多数の耕作溝を検出

要　約	古代から中世にかけての耕作溝群を検出した。坪境にあたる地点より東側では、北北西－南南東に伸びる耕作溝群と南北に伸びる耕作溝群の大きく２つのまとまりがみられる。調査区北壁の地層断面観察や既往の調査成果から、前者が古く後者が新しいものと考えられる。北北西－南南東に伸びる耕作溝群は、都市計画道路大和川線外の建設に伴う発掘調査でも同様のものが検出されており、今回の調査地から北側70mまで畠の可能性が考えられる耕作地が広がっていた様子が窺える。

松原市文化財報告　第２冊
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 297 集

池　内　遺　跡

松原市天美東土地区画整理事業地区内における店舗建設に伴う
池内遺跡（Ｃ２－４－６）発掘調査報告書

発行年月日　2019 年３月 29 日

編集　公益財団法人　大阪府文化財センター
〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁 21 番４号

発行　松原市教育委員会
〒580-8501　松原市阿保１丁目１番１号

印刷・製本　株式会社　明新社
奈良市南京終町３丁目 464 番地